

EBOOK

TBMとFinOps

FinOpsのデータと洞察
をTBMと連携させ
テクノロジー財務管理
を強化するための
ガイドブック



October 2024



目次

はじめに

1章：TBMとFinOpsの概要

TBMの概要

TBMを企業全体の規律として確立

TBMタクソノミーはテクノロジー投資を分類するための
共通言語

TBMはクラウドのビジネス価値を実現するためにFinOps
の洞察を文脈化

FinOpsフレームワークの概要

TBMとFinOpsの比較と対比

2章：TBMとFinOpsの融合

FinOpsをTBMタクソノミーに連携

パブリッククラウド支出をテクノロジーリソースプール
にマッピング

FinOpsフレームワークをテクノロジーリソースプールと
連携

パブリッククラウド支出をTBMソリューションに
マッピング

FinOpsフレームワークをTBMソリューションと連携

3章：統合的な実践のためのデータ化とタグ付け

TBMとFinOpsのための統合データ戦略

財務データと使用量データのタイミングの違いを調整

FOCUSを用いたクラウド請求の標準化

TBMとFinOps統合のためのデータタイプ

4章：成功の積み重ね

フレームワーク統合による組織能力の進化と
強化

統合された財務プロセスの力を引き出す

新しいレベルのTCO最適化を実現

タクソノミー全体でユニットエコノミクスを
継続的に向上

統合戦略を用いて戦略目標を支援

5章：将来に向けた管理

ガバナンスとチェンジのリーダーシップ

TBMとFinOpsの統合アプローチの段階的進化

TBMでクラウドのさらなる価値を推進

まとめ

付録

追加資料

はじめに

テクノロジー・ビジネス・マネジメント (TBM) は、テクノロジー投資の価値を計測して最大化するためのグローバルスタンダードな手法です。今日のデジタル環境では、クラウドコンピューティングが革新とオペレーションの効率性を推進しています。しかし、クラウド導入が増えるにつれて、クラウドへの支出を管理、最適化すること、そして効果的なデータ統合と一貫したタグ付けを行うことが難しくなっています。

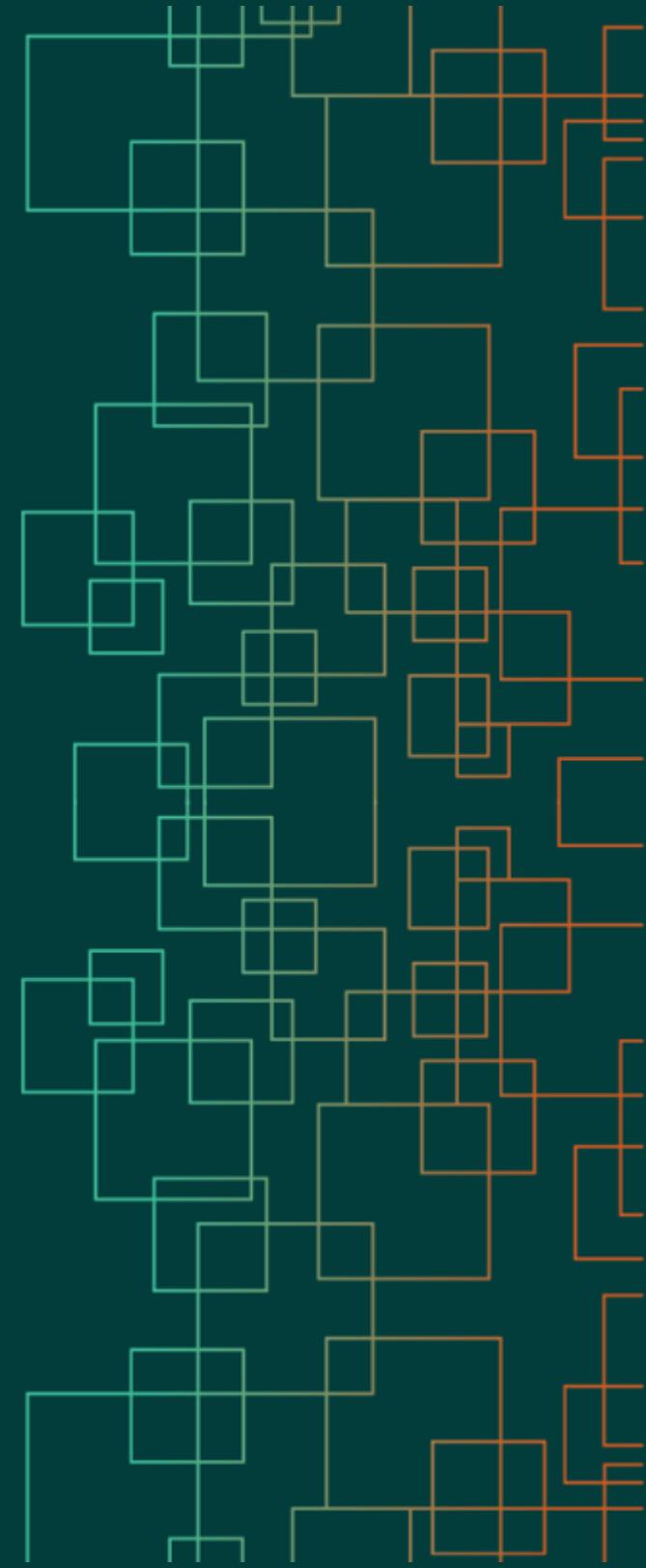
FinOpsとは、財務管理と運用を組み合わせることでクラウドのコストを最適化する方法であり、クラウド支出が多い現代の企業にとって重要な取り組みです。TBMにFinOpsを組み込むことで、クラウドリソースのリアルタイムの財務管理を行い、それをビジネスの戦略目標やオンプレミスの設備費用、労働コストを含むテクノロジー支出全体と連携させることができます。FinOpsを取り入れない場合、TBMの取り組みは予算管理がうまく行かず、予測が不十分になり、**総所有コスト (TCO)** の計算が不完全になるかもしれません。また、データ管理やリソースのタグ付けの課題に直面し、テクノロジープロジェクトからの**投資効果 (ROI)** を十分に得られない恐れがあります。

このEBookは、組織のTBM (Technology Business Management) にFinOpsを統合するための詳細な手引きを提供します。これにより、企業はより高度な可視性を確保し、財務の責任を強化し、テクノロジー投資を戦略的に調整し、堅固なデータガバナンスを確立することができます。TBMの包括的なフレームワークを活用し、FinOpsの能力を組み込むことで、企業は情報に基づいた意思決定を行い、クラウド支出を最適化し、一貫したタグ付け戦略を通じてデータの質を向上させて、DXの取り組みから持続的な価値を引き出すことが可能になります。

本書で解説している重要なポイント:

- FinOpsの洞察をTBMの分類体系に統合する: FinOpsのデータと実践をTBMのフレームワークに組み込む。
- TBMとFinOpsの機能とプロセスを結びつける: 両者を組み合わせ、一貫性のある財務管理戦略を作り上げる。
- データ統合とタグ付けの戦略: TBMとFinOps間でのデータフローを正確かつ一貫したものにして、信頼性のあるレポートを作成する。
- ガバナンスと変革リーダーシップの戦略: TBMとFinOpsの統合された実践を効果的に導入し、継続的な改善を支援するための共通の目標と優先事項を設定し、調整を図る。

1章： TBMとFinOpsの概要



TBMの概要

TBMはテクノロジー、財務、ビジネスをつなぐ役割を果たし、以下の方法でテクノロジーがどのようにビジネス価値を生むかに関する具体的な対話を可能にします。

- ・ 企業戦略に基づいた成果を達成する
- ・ 企業全体に透明性を提供する
- ・ 部門間での信頼性を確立し、連携を高める

TBMは、顧客、市場、ビジネスのニーズに焦点を当てることで組織を連携させます。これにより、ビジネス、財務、IT部門に**共通言語**をもたらし、意思決定できるようにします。具体的には以下のような方法で実現します。

- ・ 価値の最適な提供を保証するためのトレードオフを可能にする
- ・ データに基づいた意思決定を促進し、事実に基づいた判断を確実にする
- ・ テクノロジー投資からビジネス価値を創出することを目指し、エコシステム全体での協力を推進する

TBMは、CIOやCTOをはじめ、CEO、CFO、COOなどのビジネスリーダーがテクノロジーを活用してより良いビジネス成果を達成するための共通言語と洞察を提供し、組織をつなぐ架け橋の役割を果たします。

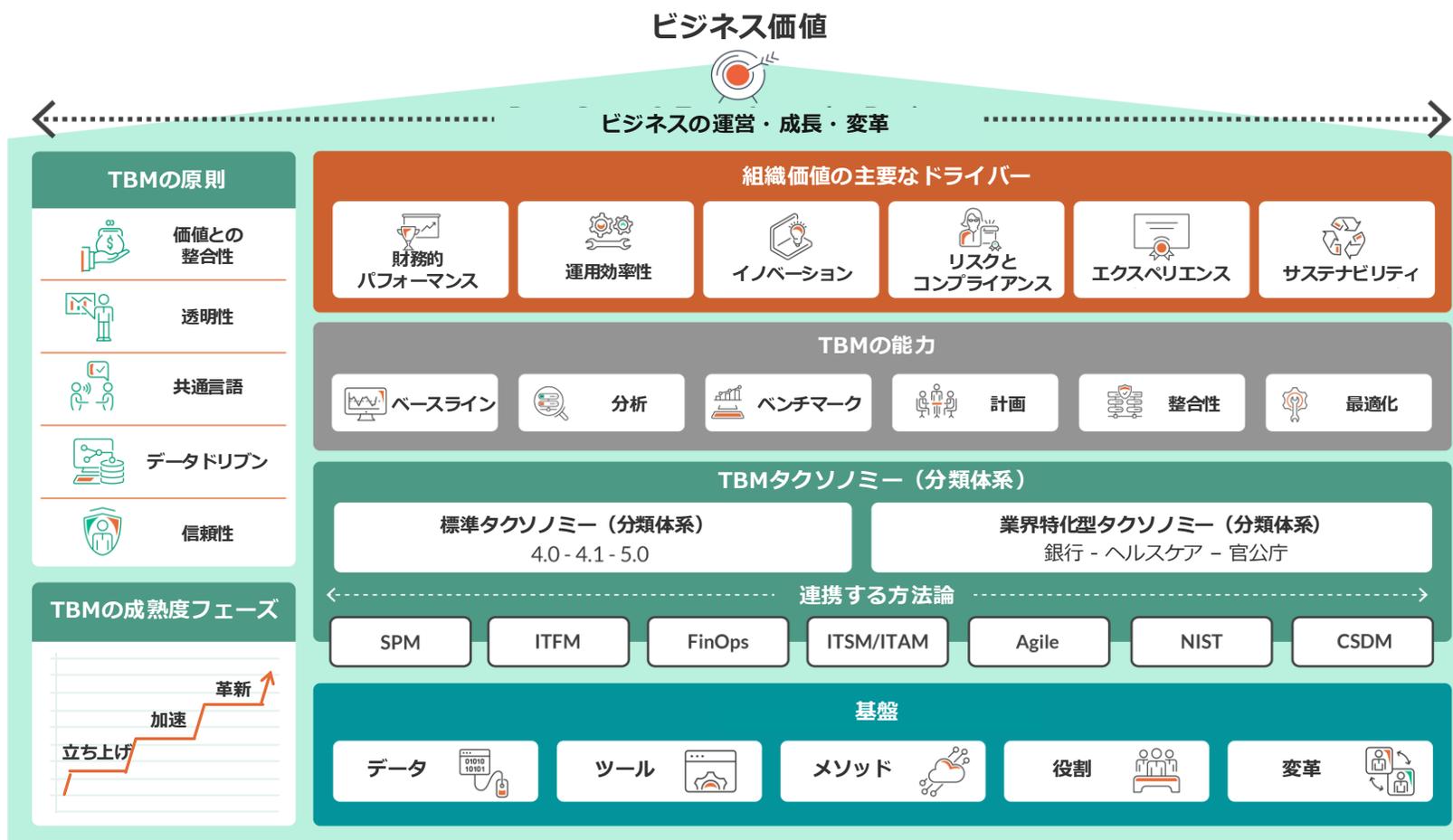
規律と知識

テクノロジー・ビジネス・マネジメント (TBM) はソフトウェアではありません。TBMは、テクノロジー投資を管理するための**手法**で、**価値、コスト、パフォーマンス**の理解に重点を置いています。TBMには、方法論、ツール、指標が含まれており、テクノロジー管理における重要な手法となっています。TBMの手法は、テクノロジー戦略をビジネス戦略やステークホルダーの目標と情報共有し、整合させる好循環を作り出します。



TBMを企業全体の規律として確立

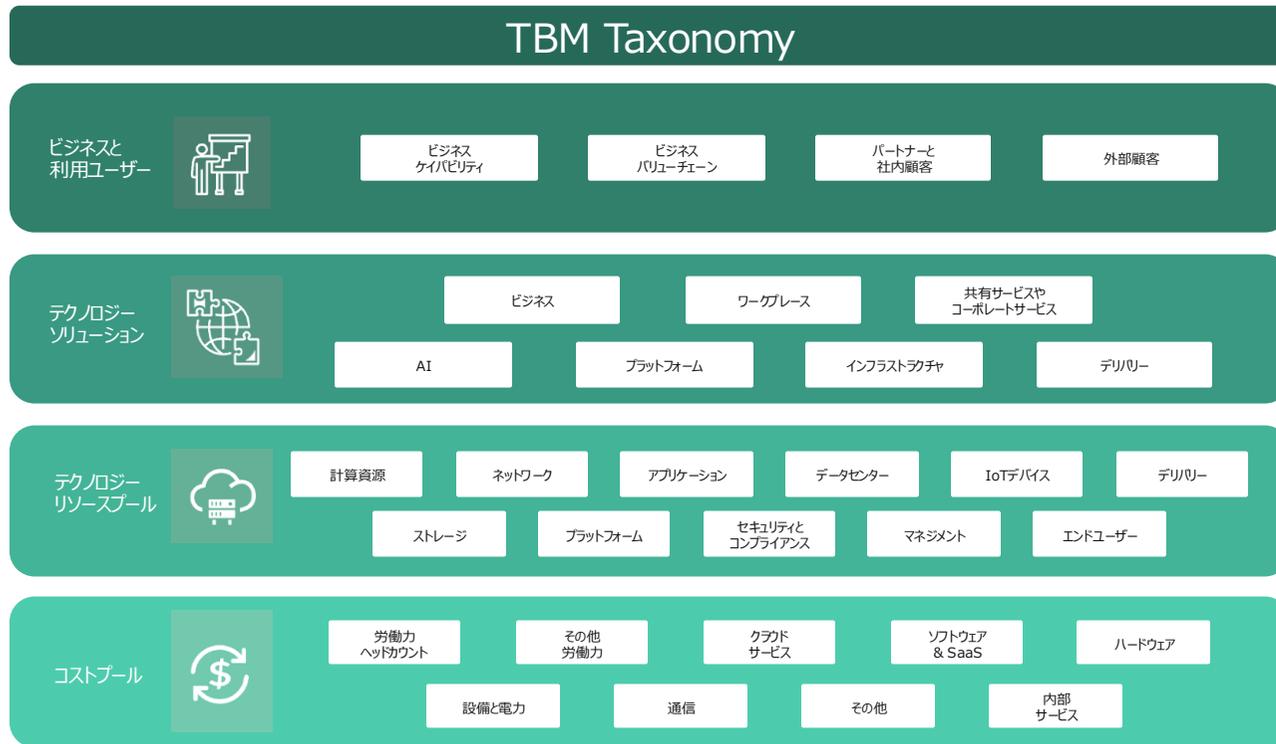
TBMフレームワーク 2.0は、このアプローチに関する様々な要素を統一された構造に整理し、テクノロジーリーダーがTBMを導入し、その成功と持続的な発展を支援します。また、迅速に価値を示せるように設計されています。このフレームワークは、TBMを新たに導入するチームと、既に導入経験のあるチームの双方に、TBMの成熟度を高めるための道筋を指し示します。「運用」「成長」「変革」を通じた全ての活動を価値創造に結びつけることを可能にします。さらに、このフレームワークは基本原則に基づいており、TBMの能力、モデル設計、統合した基準、およびデータ管理を通じて、価値の主要要素に影響を与えます。そして、組織の戦略を支える重要な役割を担います。



注記 | これはTBMフレームワーク2.0の暫定バージョンであり、最終的な内容とは異なる場合があります。

TBMタクソノミーはテクノロジー投資を分類するための共通言語

TBMタクソノミー（分類体系）は、**テクノロジーリソース**、**コスト**、**サービス**を理解するためのフレームワークです。この仕組みは、テクノロジー投資を分析し、報告するための共通の言語と枠組みを提供します。テクノロジーに関するすべての支出、つまり資本的支出（CapEx）、運営費用（OpEx）、およびテクノロジーサービスに関連する費用を含んでいます。ここで言うテクノロジーサービスとは、組織が顧客や社内利用者に提供するテクノロジーの機能や能力を指します。



TTBMのタクソノミーは、**コストの可視性向上、パフォーマンス測定**の強化、**データドリブンの意思決定、円滑なコミュニケーション**など、さまざまなメリットを提供します。テクノロジーコストがどのようにサービスや事業部門に配賦されているかを理解することで、企業は支出を最適化し、無駄を削減できます。これは、テクノロジーリーダーがコストを価値に変換するために重要です。また、データドリブンの意思決定の基盤を提供し、リソースの効果的な配分やテクノロジーの優先順位付けを可能にします。**共通の分類法**により、IT部門とビジネス部門の関係者が同じ言葉で話すことができ、コミュニケーションとコラボレーションが改善されます。

注記 | これはTBMタクソノミー5.0の暫定バージョンであり、最終的な内容とは異なる場合があります。

TBMはクラウドのビジネス価値を実現するために FinOpsの洞察を文脈化

企業が多様なパブリッククラウドサービスをますます採用する中で、TBMはクラウドの導入がどのようにビジネス価値を生み出すのかを理解するための重要な洞察を提供します。TBMは、パブリッククラウドに限らず、オンプレミスのインフラ、レガシーシステム、労働力、ソフトウェア、製品、サービスといったコストの透明性を含む、幅広いテクノロジー管理の枠組みを提供します。

一方、FinOpsフレームワークは、パブリッククラウド支出の最適化に特化しており、リアルタイムの意思決定や料金の最適化、クラウド利用時の異常検知といった専門的なソリューションを提供します。これは、特定の課題に焦点を当て、それを現代のテクノロジー管理の重要な要素として確立するDevOpsやSecOpsなどの専門実践と似ています。

これらの専門的な実践を全体的なTBMの枠組みと統合することで、企業は特定の領域における深い洞察を得られるだけでなく、それをデジタル製品やサービス、ポートフォリオ、組織全体の見通しに組み入れることが可能になります。FinOpsにおいては、TBMがパブリッククラウドの支出を大きなハイブリッドクラウド戦略や企業のテクノロジー的な優先事項、投資の一部として位置付けます。

TBMは、企業のテクノロジー投資と価値計画を俯瞰する全体像を提供しますが、FinOpsは日々の管理における意思決定をサポートし、パブリッククラウドの支出を最適化します。



FinOpsフレームワークの概要

FinOpsは、クラウドのビジネス価値を最大化し、タイムリーなデータを基にした意思決定を可能にし、エンジニアリング、財務、ビジネス部門の連携を通じて財務上の責任を確立するための運用フレームワークおよび実践です。

この実践は、「クラウド財務管理」「クラウド財務エンジニアリング」「クラウドコスト管理」「クラウド最適化」または「クラウド財務最適化」などとも呼ばれます。

原則

- チーム間のコラボレーションが必要
- クラウドのビジネス価値主導の意思決定
- クラウドの使用量に全員が責任を負う
- FinOpsデータはアクセスしやすくタイムリーである必要がある
- 一元的なチームがFinOpsを推進する
- クラウドの多様なコストモデルを活用する

領域と能力

FinOps.org		
クラウド使用量とコストの理解	事業価値の定量化	クラウド使用量とコストの最適化
データの取り込み	計画と見積もり	ベンチマーク
配分	予測	ユニットエコノミクス
報告と分析	予算編成	クラウドのためのアーキテクティング
異常管理		ワークロードの最適化
		レート最適化
		クラウドサステナビリティ
		ライセンスとSaaS
FinOps実践の管理		
FinOps実践の運用	クラウドポリシーとガバナンス	FinOpsの評価
FinOpsの教育と普及	請求とチャージバック	オンボーディングワークロード
		FinOpsのツールとサービス
		交差する規律

中核となるペルソナ

- エンジニアリング
- FinOpsの実践者
- 財務
- リーダーシップ
- 調達
- 製品

連携するペルソナ

- ITAM
- ITFM
- ITSM
- セキュリティ
- 持続可能性

フェーズ



成熟度

- Crawl (ハイハイ)
- Walk (歩く)
- Run (走る)

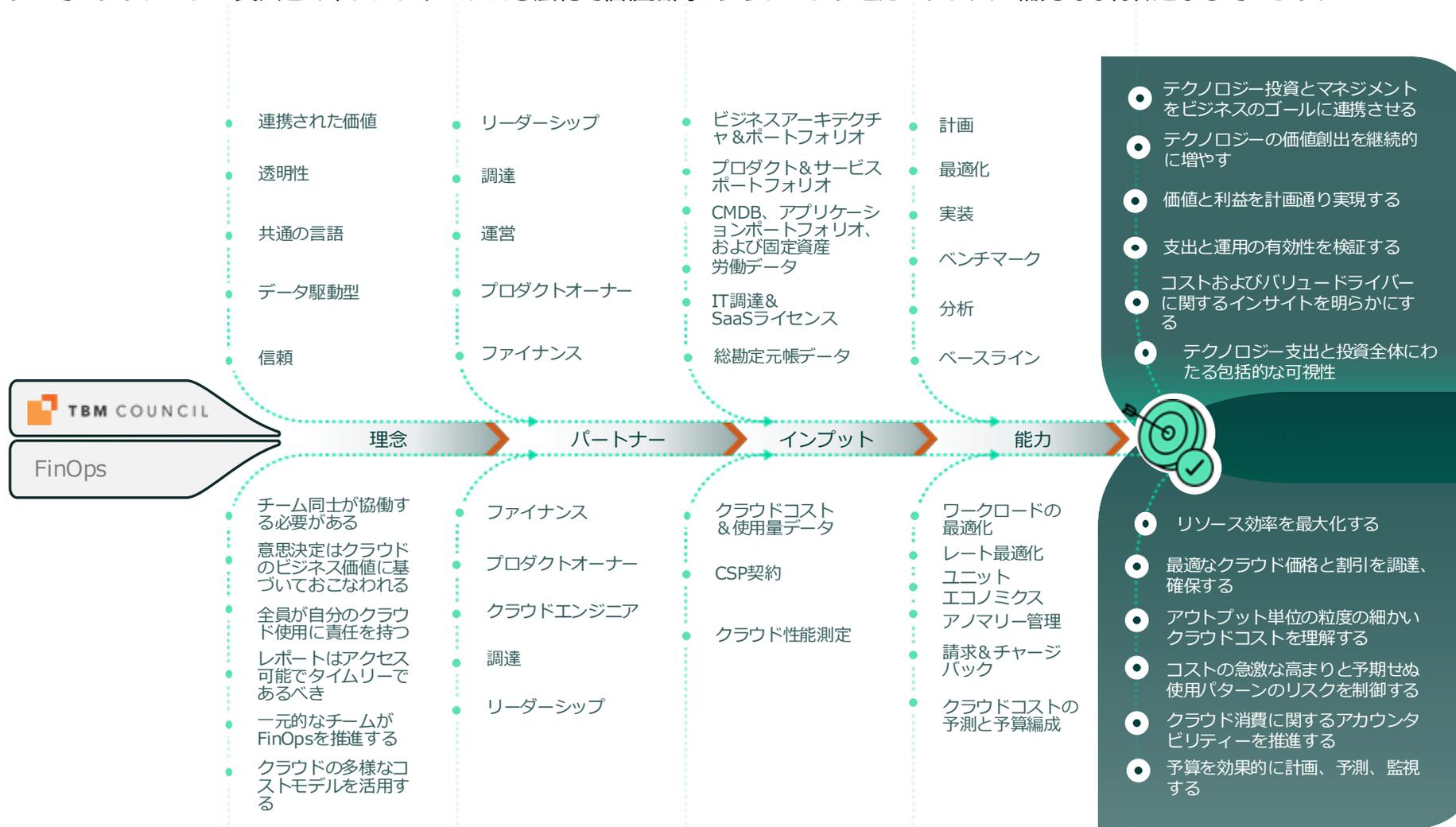
注記

この文書では、**FinOps**は特に**クラウドFinOps**を指し、一部の組織に存在する別の実践であるFinOpsとは異なります。これはファイナンス・オペレーションズの略であり、純粋に財務プロセスに焦点を当てるものです。**Cloud FinOps**とは、「**ファイナンス**」と「**DevOps**」の複合語であり、クラウド環境におけるファイナンスとエンジニアリングのコラボレーションを強調するものです。

FinOpsとは?

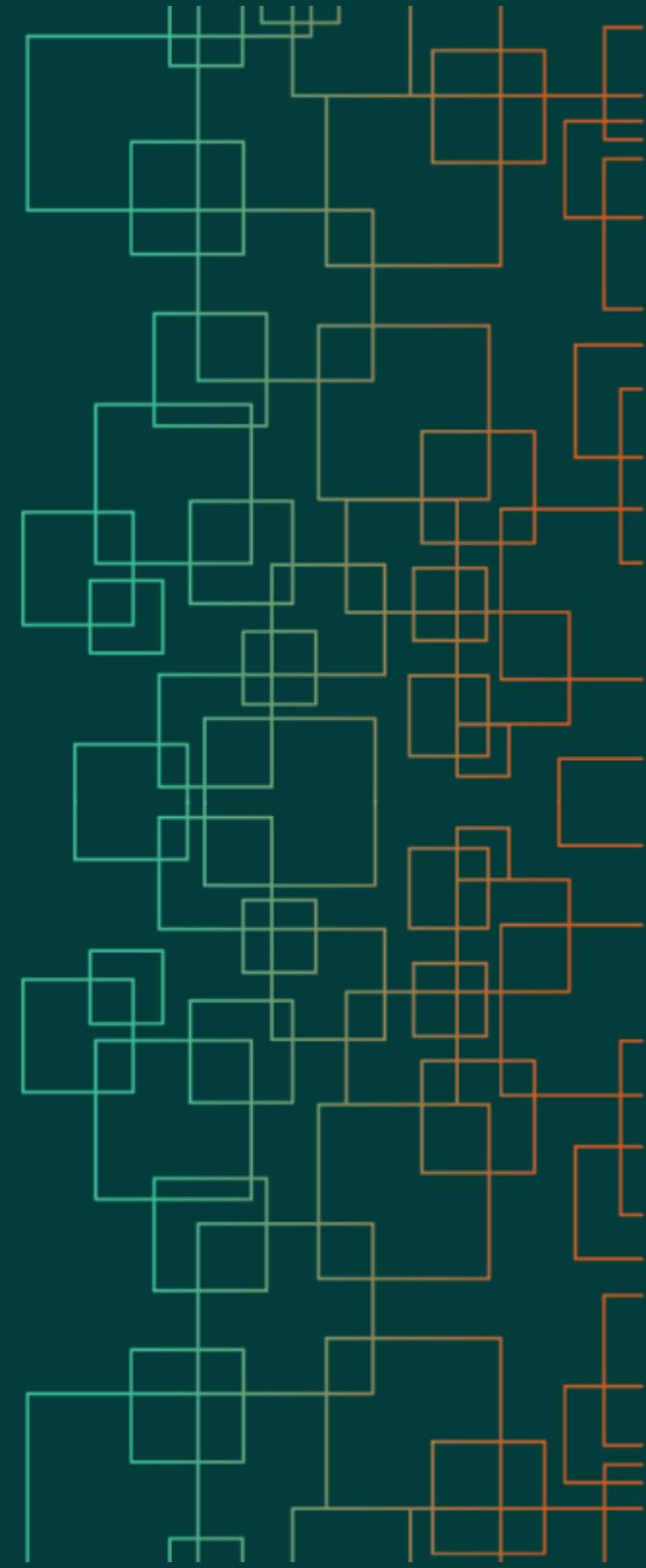
TBMとFinOpsの比較と対比

以下の画像は、さまざまな領域におけるTBMとFinOpsの比較を図示しています。規律と実践固有の原理、インプット、能力をハイライトし、さらに重複するパートナーも示しています。この画像は、パブリッククラウドのターゲットを絞ったコスト管理を加味して、すべてのテクノロジー支出とマネジメントにわたる広範で価値指向のプランニングとガバナンスの補完的な特徴を示しています。



注記 | このイメージは例示を目的としていて、すべての範囲をカバーすることを意図したものではありません。TBMおよびFinOpsはそれぞれ、ここに表示されている内容を越えた追加のパートナー、インプット、能力についての複雑なドメインを反映しています。

2章： TBMとFinOpsの 融合



FinOpsをTBMタクソノミーに連携

FinOpsをTBMに統合する最初のステップとして、FinOpsフレームワークの要素（インサイト、ペルソナ、ドメイン、能力など）を、TBMタクソノミーに接続、連携させ、FinOpsチームにタクソノミーを認知してもらいます。これにより、FinOps活動とインサイトをテクノロジー投資と事業成果のより幅広い価値に文脈化するための基礎構造ができます。この接続は、管理されていないパブリッククラウド支出または増大するパブリッククラウド支出によって組織全体のデジタルプロダクトおよびサービスの価値が損なわれないよう保証します。

TBMタクソノミー5.0&パブリッククラウドコストプール

TBMタクソノミー4.1以前は、パブリッククラウド支出を社外サービスコストプール配下に分類していました。タクソノミー5.0（現在ドラフトステータスにあり、パブリックコメント募集中）はパブリッククラウド支出に専用のコストプールを追加します。SaaSベースの請求、オンプレミスインフラ、従来型のリースまたは管理サービスホスティングに関連するコストは、別途定義されたコストプールに分類されることに留意してください。

すべてのパブリッククラウド支出を専用のトップレベルコストプールに割り当てることで、組織はクラウドコスト管理での粒度をさらに細かくして、他の種類の支出からパブリッククラウド支出をすぐに差別化できます。**組織のFinOps実践のゴールは、このプール内の支出を100%最適化し、プロダクトオーナーに改善の機会を伝達して、効率的なクラウド利用を推進することであるべきです。**

パブリッククラウド専用コストプールの利点



強化された可視性：一目で見られて、他のコストタイプと比較ができるトップレベルの支出追跡を容易にし、ベンチマーク、予算設定、報告の強化を可能にします。



ターゲットを絞った最適化：FinOps実践を介して、単一のコストプール上での焦点を絞った最適化を適用します。



改善されたアカウントビリティー：他のITおよびテクノロジーインフラと分けてクラウドコストを管理することで、より明確なアカウントビリティー構造を提供します。

パブリッククラウド支出をテクノロジーリソースプールにマッピング

次のステップは、クラウドコストプールから適切なテクノロジーリソースプール（TBM分類体系4.1以前では「ITリソースタワー」と呼ばれていました）へのコストを配分することです。このマッピングは、CIO、クラウドセンターオブエクセレンス（CoEs）、およびプロダクトチームが、デジタルソリューションを開発・提供・運用するために使用されるテクノロジーリソースのコストと消費について、より深い洞察を得ることができます。

右の表は、主要なクラウドサービスプロバイダー（CSP）による推奨配分を示しており、これらのマッピングの開発に役立つ参考資料です。

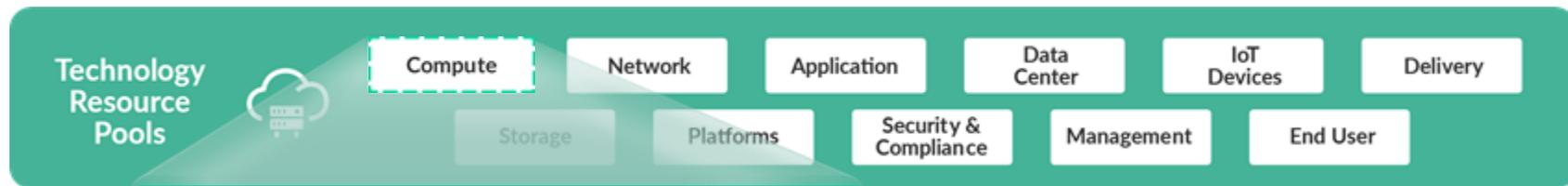
クラウドサービスコストプールの支出をテクノロジーリソースプールにマッピングすることで、FinOpsの実践において、特定のリソース領域における洞察を関連付けることができます。これにより、FinOpsチームはコストと消費の要因を特定し、最適化の機会を見つけ、リソースの非効率を解消することが可能となります。さらに、各ドメインごとにコストと消費の傾向をベンチマークし追跡するための可視性を提供します。

TBM テクノロジー プール	クラウドサービス	説明
コンピューティング	Amazon EC2、Azure VMs、Google Compute Engine	スケーラブルなコンピューティングリソース
ネットワーク	AWS VPC、Azure Virtual Network、Google Cloud VPC	ネットワーク管理とCDNサービス
ストレージ	Amazon S3、Azure Blob Storage、Google Cloud Storage	スケーラブルなストレージソリューション
プラットフォーム	AWS Lambda、Azure App Service、Google App Engine	開発および管理プラットフォーム
アプリケーション	Salesforce、Microsoft 365、Slack、Dropbox	エンドユーザー向けSaaSアプリケーション
セキュリティとコンプライアンス	AWS IAM、Azure Security Center、Google Cloud Identity	アイデンティティ管理とコンプライアンスツール
データセンター	AWS Outposts、Azure Stack、Google Anthos	オンプレミスまで広がるハイブリッドクラウドソリューション
マネジメント	AWS CloudFormation、Azure Resource Manager	リソース管理とオートメーションツール
IoTデバイス	AWS IoT Core、Azure IoT Hub、Google Cloud IoT	IoTデバイス管理とデータ収集
エンドユーザー	Amazon WorkSpaces、Azure Virtual Desktop	アプリケーションおよびデスクトップへのエンドユーザーアクセス
デリバリー	AWS CloudFront、Cloudflare	コンテンツとアプリケーションの効率的なデリバリー

FinOpsフレームワークをテクノロジーリソースプールと連携

一般的なコスト最適化も効果がありますが、テクノロジーリソースプールはFinOpsフレームワークをより効果的に適用できる場所です。FinOpsチームは、TBMのテクノロジーリソースプールを利用して、ビジネス価値を最大化するために活動を行います。さまざまなFinOpsの取り組みをリソースプールに合わせ、具体的なアクションや関係者への情報提供が可能になります。

以下の例では、特定のFinOpsの領域がどのようにテクノロジーリソースプールと関連づけられるかを示しています。多くのリソースプールは、複数のFinOps領域を組み合わせることで、より多くのメリットを享受できます。FinOpsチームは、フレームワークの「現状把握」「最適化」「実行&運用」の各段階を活用し、リソースプールごとの行動指針を明確にします。さらに、チームは「Crawl (ハイハイ)」「Walk (歩く)」「Run (走る)」の成熟度レベルを考慮することで、リソースプールで支出を完全に最適化する能力を自己評価できるようになり、さらに恩恵を受けることができます。



利点: さらに広範なチームまで可視性を拡張して、データに基づいた調整を通してリソースを最適化し、コンピューティング支出を需要と連携させられるようにします。

- **FinOpsドメイン:** クラウド使用&コストを最適化する
- **FinOps能力:** ワークロードの最適化
- **ペルソナ:** オペレーション、エンジニアリング
- **アクション:** ワークロードの効率を高める機会を探す

- **FinOpsドメイン:** クラウド使用&コストを最適化する
- **FinOps能力:** レート最適化
- **アクション:** 節約コミットメントを適用する機会を特定する

- **FinOpsドメイン:** クラウド使用&コストを理解する
- **FinOps能力:** アノマリー検知
- **アクション:** クラウド支出が管理され、制御不能な支出が発生しないようにする

パブリッククラウド支出をTBMソリューションにマッピング

テクノロジーリソースプールからのパブリッククラウド支出をTBMソリューションレイヤーにマッピングすることで、組織はクラウドリソースと関連コストを直接製品やサービスに結びつけ、ビジネス価値を高めることができます。コストは、コンピューティング、ストレージ、ネットワーク、プラットフォームなどのクラウドテクノロジーリソースの消費量に応じて配分されます。

このレイヤーは、FinOpsチームがさらなるコンテキストと価値創造の機会を得るための重要な役割を果たします。このレイヤーは、設計上、インフラに依存せずクラウドの詳細を抽象化し、提供されるソリューションがビジネスや消費者にどのように適合するかに焦点を当てています。

FinOpsの実践をソリューションレイヤーと結びつけることで、FinOpsチームはTBMを使用しない場合よりも広範な戦略的価値を引き出すことができます。追加の利点には以下が含まれます。

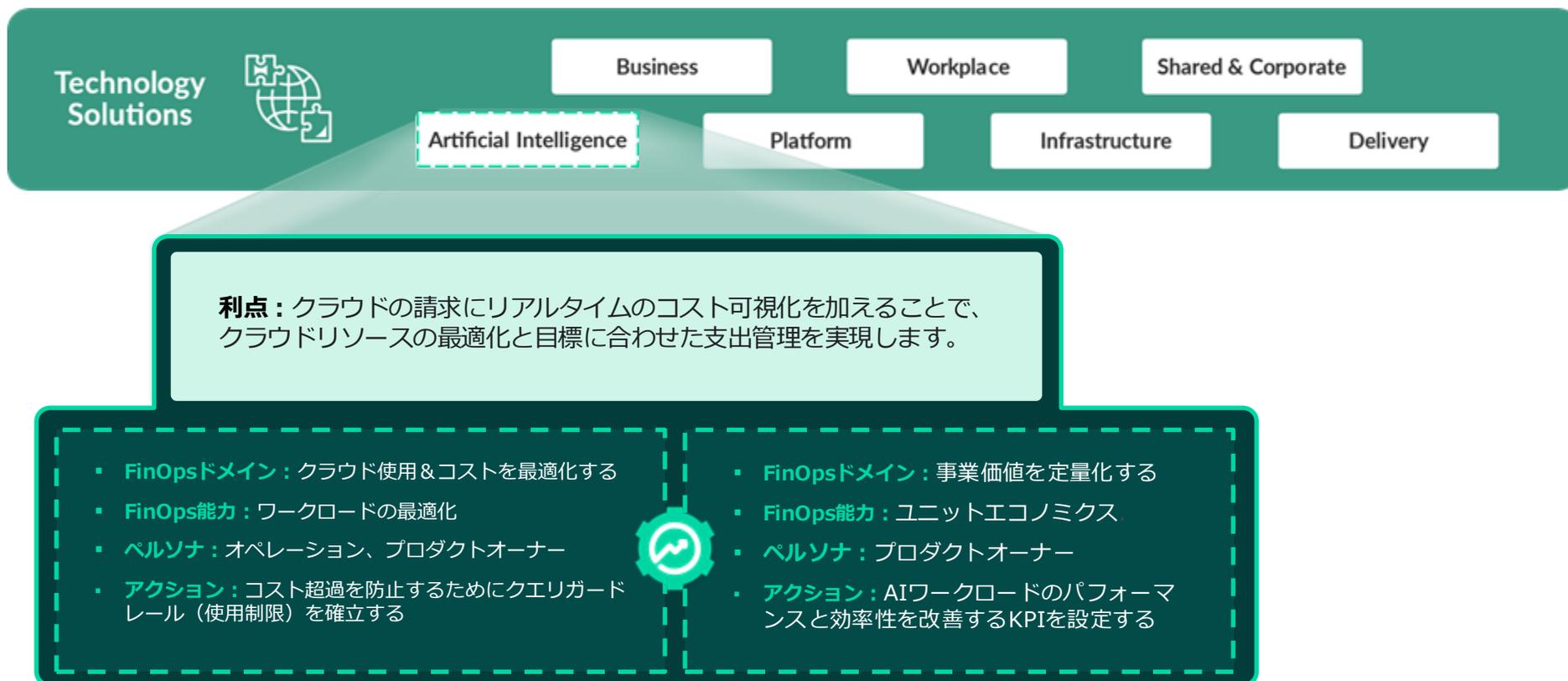
- リソース消費に対する強化された説明責任
- コスト回収のための合理的なショーバックとチャージバック
- 特定の製品やサービスに合わせたソリューションレベルでのリソースとコストの最適化
- クラウドのROIを特定のソリューションに合わせることで、価値追跡が改善されます

インフラストラクチャーサービス		
ネットワーク	コンピューティング	ストレージ
インターネット接続性	バーチャルコンピューター & コンテナ	ネットワーク化されたストレージ
データ転送	EC2インスタンス	Elastic Block Storage (EBS)
ネットワークング	Elastic Container Service (ECS)	Storage Gateway
GCE-ネットワーク	Elastic Kubernetes Service (EKS)	マネージドディスク
仮想プライベートネットワーク	Azure Virtual Machine	Persistent Disk
Virtual Private Cloud (VPC)	Azure Kubernetes Service (AKS)	ファイル & オブジェクトストレージ
Direct Connect	GCE仮想マシン	Simple Storage Service (S3)
ExpressRoute	Google Kubernetes Engine (GKE)	Blob Storage
Virtual Network	サーバーレスコンピューティング	Cloud Storage
VPN Gateway	Lambda	バックアップ & アーカイブ
GCE-ネットワーク	Cloud Functions	Glacier
VPNトンネル	Cloud Functions	バックアップ
ドメインサービス	物理的なコンピューター	Nearline
Route53	メインフレーム	Coldline
DNS		分散型ストレージ
Cloud DNS		CloudFront
GCE-ネットワーク		CDN
IPアドレス		Cloud CDN
ロードバランシング		GCE-ネットワーク
Application Load Balancer		CDNCacheFill
Gateway Load Balancer		
Network Load Balancer		
Azure Load Balancer		
Google Cloud		
ロードバランサー		

FinOpsフレームワークをTBMソリューションと連携

FinOpsフレームワークの要素であるドメインや能力、ペルソナをTBMタクソノミーのソリューションレイヤーと連携させることで、数多くの価値創造の機会が得られます。具体的には、この取り組みによってクラウドの支出と運用を事業価値に直接結びつける最適な方法を示します。

FinOpsフレームワークの要素とTBMソリューションの連携に関して、いくつかの例を以下に挙げます。これらの例はあくまで代表的なものであり、各ソリューションタイプやカテゴリー、特定の製品やサービスは、複数のFinOpsドメインとの連携から恩恵を受けることができます。また、FinOpsチームは、[FinOpsフレームワーク](#)で定義されている「情報把握」「最適化」「実行&運用」のフェーズを製品やサービスのサポートガイドとして利用することを検討できます。さらに、「ハイハイ」「歩く」「走る」といった成熟度レベルがどのようにプロダクトやサービスの提供に付加価値をもたらすかも考慮できます。



3章： 統合的な実践のための データ化とタグ付け

TBMとFinOpsのための統合データ戦略

統合されたTBM（Technology Business Management）とFinOps（Financial Operations）の実践の強みを最大限に活用するためには、組織はクラウド、オンプレミス、その他すべてのテクノロジーリソースタイプにおける運用上および財務上の多角的な洞察を一貫して結びつけるデータ戦略を採用しなければなりません。このようなデータ戦略により、TBMおよびFinOpsのチームが効果的に協力し、リアルタイムのクラウドコスト管理と体系化された財務報告を一致させて、テクノロジー支出の包括的な視界を作り出すことができます。

組織的なタグ付け戦略

クラウドとオンプレミスのリソースに対して、アプリケーションコード、プロジェクトコード、コストセンターといった識別子を用いて一貫したタグ付けを行うことで、TBM（Technology Business Management）とFinOps（Financial Operations）のチームは、TBMタクソノミーの中での配賦やチャージバックを容易にするために、FinOpsデータを活用できます。さらに、構成管理データベース（CMDB）のような共通のリポジトリを使用すると、タグ付けの取り組みを整理し、財務報告や運用報告において整合性を保つことが可能になります。

連携のための共通のゴール

両チームが一致できる明確な目標と優先事項を設定することで、TBM（Technology Business Management）とFinOps（Financial Operations）の実践間での連携が促進され、より良い共同成果を生み出すことができます。これらのフレームワークは、共通の原則を重視しています。さらに、ストレージリソースの最適化やAIソリューションに関連するクラウド支出の管理といった明確な優先事項を設定することで、チームはどの能力や支援データを優先すべきかを明確に理解することができます。



財務データと使用量データのタイミングの違いを調整

TBM (Technology Business Management) とFinOps (Financial Operations) の実践を統合することで、特にクラウドの消費データを財務報告のサイクルに合わせる際に、データのタイミングの違いが浮き彫りになります。FinOpsは通常、クラウドの使用状況と関連する支出に迅速に対応するためにリアルタイムデータに依存していますが、TBMはベンダーの請求や企業の財務報告に合わせた月次または四半期ごとのサイクルで運用されます。この違いは、AWS費用と使用レポートのようなほぼリアルタイムのデータを請求書に基づく総勘定元帳 (GL) データと結びつける際に最も顕著に表れ、一貫性と正確性を維持するために慎重な調整が必要です。

このような課題を抱えつつも、これら2つのデータタイムラインを連携させて、組織がひとつの一貫性のある財務フレームワークにしっかりと根差しながら、複雑で動的なクラウド環境を能動的に管理する能力を高める機会にもなります。

データを同期する

FinOpsのクラウド使用データは、しばしば総勘定元帳 (GL) に記録される請求書データよりも1~2ヶ月先行しています。この問題に対処するために、特定のFinOpsデータに対して補正を行い、会計期間と整合させることができます。これにより、使用データがGLにきちんと結びつけられ、明確な財務監査の履歴が維持されつつ、FinOpsチームはリアルタイムデータに基づいて行動を取ることが可能になります。

タイミングの違いを戦略的優位性として

タイミングの違いにはチャンスもあります。たとえば、リアルタイムの情報としっかりとした財務報告を組み合わせることで、より良い意思決定ができるようになります。この組み合わせを使うと、TBMを担当する人たちは、最新の使用状況と完全な財務データの両方を活用して、データに基づいた賢い選択ができるようになります。

意思決定のためのバランスの取れたアプローチ

これらのタイミングの違いを調整することで、組織はTBMデータとFinOpsデータを活用したバランスの取れた報告構造を作ることができます。これにより、組織はリソースのリアルタイムな最適化と広範な財務の視点を同時に管理でき、即時的な目標と戦略的な目標の両方に対応することが可能になります。

FOCUSを用いたクラウド請求の標準化

FinOps Open Cost and Usage Specification (FOCUS) は、プロバイダー間でクラウドの請求データを標準化するフォーマットを提供し、複雑なデータの正規化の必要性を減らします。FOCUSは主要なクラウドベンダーによってサポートされており、一貫した列名とデータ構造により、マルチクラウド報告を簡素化します。これにより、FinOpsおよびTBMチームは、統一された信頼できる情報基盤に基づいて効率的に作業できる大きな機会を得られます。

FOCUSは、異なるベンダーからの請求データをシームレスに統合できるようにすることで、統合されたFinOpsとTBMの実践に利益をもたらします。これにより、異なる環境間でのリアルタイム追跡、過去の分析、予測の管理がはるかに容易になります。ベンダーを超えてクラウドデータを統合することで、FOCUSは部門間の整合性を高め、報告の精度を向上させ、より良い意思決定をサポートします。これらすべてを、新しいプロバイダーの統合の複雑性を軽減しながら実現します。

統合されたTBMとFinOps実践に対するFOCUSの利点

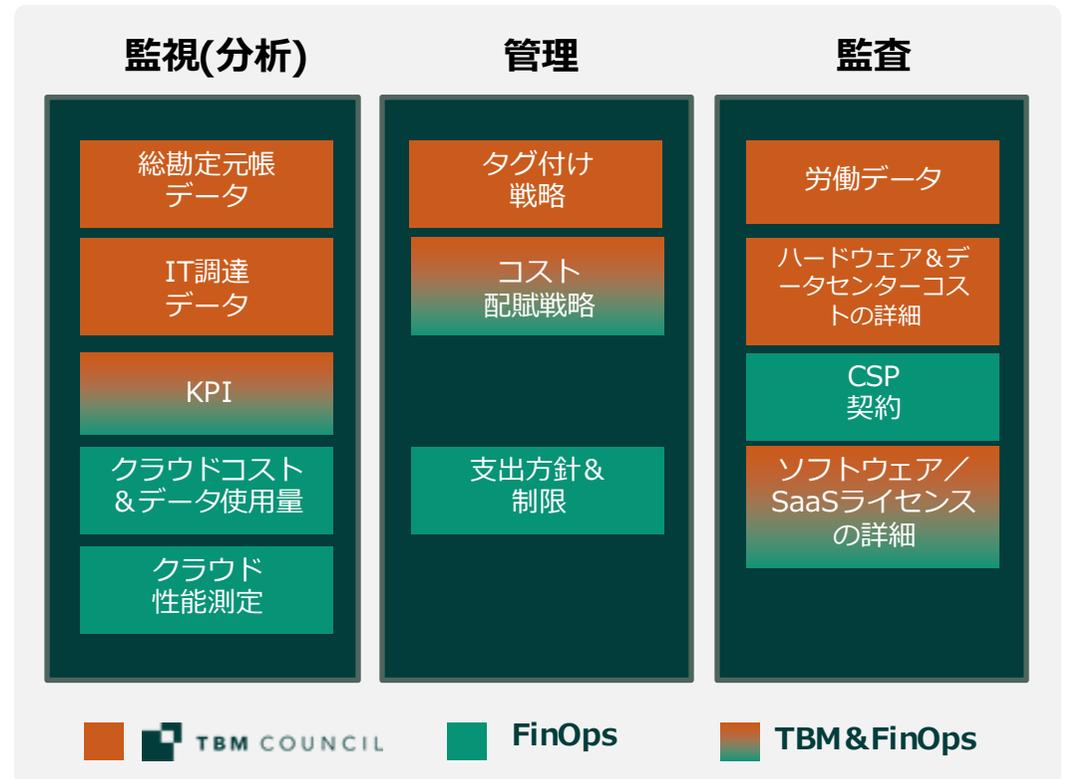
1. 一貫性のあるコスト報告
2. 複雑の軽減
3. マルチクラウドの視認性向上



TBMとFinOps統合のためのデータタイプ

TBMとFinOpsを効果的に統合するには、目的と使用頻度に基づいてデータを区分することが必要不可欠です。財務システムと運用システムの間でのデータフローにおいて、このアプローチは、両部門がデータに優先度をつけて管理するうえで役立ちます。データはさまざまな方法で分けられますが、TBMとFinOpsの統合データ戦略の文脈では、主に3つの方法でデータを考えることができます。

- **監視**：値が理想的な範囲内に収まっていることを確認するために継続的に観察されます。例えば、組織のクラウド支出と使用状況のデータは、異常な支出や使用がないか常に監視されるべきです。
- **管理**：厳格な基準に従って保持されます。例えば、タグ付けがあります。タグは通常、個々のリソースに付けられますが、そのタグ付けの質とコンプライアンスは、TBMとFinOpsの実践において時間をかけて維持されます。
- **監査**：頻繁に見直されないが、しばしば法的な要件のため必要な時に使えるよう長期間にわたって維持が必要なもの。例として、毎日見直す必要はないが潜在的な政府による監査などのイベントに備えて維持されるべき労働データが挙げられます。



4章： 成功の積み重ね

フレームワーク統合による組織能力の進化と強化

FinOpsがタクソミーを活用してTBMと合理的に統合されると、組織はクラウドやテクノロジーへの投資を通じた価値創造において、透明性と信頼性を大幅に高めることができます。その結果、クラウドチーム、IT部門、ビジネス部門のリーダーたちは、リアルタイムのクラウド使用状況を把握できる統一されたフレームワークを手に入れることができるようになります。TBMタクソミーを介してクラウドの財務データをシームレスに連携させることによって、既存の能力やプロセスに新たな潜在力が生まれ、可視性、最適化、調整がさらに向上します。

テクノロジー支出の総合的な価値

テクノロジー投資による完全なインパクトを理解することは、ビジネスの成功を推進するために必要不可欠です。TBMとFinOpsを統合することで、組織はテクノロジー支出を戦略的ゴールと整合させ、すべての投資が大きな成果に貢献するようにできます。

総合的な利点：

- **包括的な可視性：**テクノロジーコストとそれらがビジネスパフォーマンスに与える影響について統一された見方を取得し、情報に基づいた意思決定を可能にします。
- **戦略的な調整：**テクノロジー投資を直接事業目標にリンクして、効率的なリソース配賦を確実にし、ROIを最大化します。

高められた価値：この統合されたアプローチはテクノロジー支出が能動的に戦略的イニシアチブをサポートし、持続的成長と競争力を発展させます。

エンタープライズアプリケーションの合理化

アプリケーションポートフォリオの最適化は、冗長性の削減とコストの効果的な管理にとって必須です。TBMとFinOpsを統合することで、組織はアプリケーションを評価、合理化し、それぞれのアプリケーションが最大の価値をもたらすようにできます。

総合的な利点：

- **コスト効率性：**重複している、またはあまり使用されていないアプリケーションを取り除き、全体のテクノロジー費用を削減してリソースを戦略的なプロジェクトに再割り当てします。
- **パフォーマンスの最適化：**ビジネスニーズを満たす高い価値のソリューションに投資を集中させることで、主要アプリケーションのパフォーマンスと信頼性を改善します。

高められた価値：TBMとFinOps統合を通してアプリケーションを合理化することで、さらに効率的なテクノロジー環境を実現し、アジャイルな運用と継続的な改善をサポートします。

プロダクトに連携されたテクノロジー支出

テクノロジー予算をプロダクト目標と整合させると、プロダクトオーナーがリソースを戦略的に管理できるようになります。

総合的な利点：

- **目標を絞った投資：**テクノロジー資金をプロダクトの優先度と性能指標に基づいて割り当て、投資が最高のインパクトをもたらせるようにします。
- **強化されたコラボレーション：**プロダクトチームと財務マネージャー間のコラボレーションを強化して、プロダクトライフサイクルに合わせた精度の高い予算編成とリソース配賦を可能にします。

高められた価値：プロダクトに合わせたテクノロジー支出は、各投資がプロダクトの成功に直接寄与し、顧客価値を高め、組織内のイノベーションを推進するようにします。

統合された財務プロセスの力を引き出す

FinOpsとTBMの連携は、計画、予算編成、予測といった中核的な財務プロセスを強化する効果もあります。2つの実践の統合が時間を経て成熟してくると、プロダクトオーナーとクラウドチームに提供できるシナリオ計画の潜在的な強化につながります。また、パブリッククラウドの支出からテクノロジーリソース、ソリューション、事業単位やユーザー単位へのコスト配分をさらに自動化することで、TBM チームや財務チームにおける大幅な業務効率化も期待できます。

計画策定&予算作成

TBMとFinOpsの統合により、財務の中核業務は精度と予測性の向上という形で恩恵を受けます。リソースの使用状況が可視化されることで、チームはより効率的に予算を立てることができ、実際の消費傾向に基づいて柔軟に計画を調整することが可能になります。

総合的な利点：

- **精度の改善：** 詳細なクラウド支出データに基づいて予算を作成し、その予算を特定のテクノロジーリソースプール、ソリューション、またはビジネスユニットに直接マッピングできます。
- **機能横断型計画：** TBM、クラウド、財務およびプロダクトチームは共通のデータセット上で協働し、配賦と財務計画での整合性を確保できます。

高められた価値： 予算とリソース計画をデータに基づいて作成し、当て推量と資金不足またはリソースの過剰使用のリスクを削減します。

自動化されたコスト配賦

統合された取り組みにより、詳細なクラウド支出をテクノロジーリソース、ソリューション、そして利用部門やユーザーに結びつける自動的なコスト配分が可能になります。これにより、ショーバックやチャージバックの活動全体で効率性が高まると同時に、透明性と説明責任も促進されます。

総合的な利点：

- **エンドツーエンドの自動化：** リアルタイムデータに基づき、TBMタクソノミー全体にわたってコストを自動的に割り当てることができ、手作業のプロセスを排除します。プロセスをなくすことができます。
- **詳細なショーバック/チャージバック情報：** チームや利用部門は、コストの要因を把握するために詳細情報を深掘りして確認することができます。

高められた価値： 効率化されたされたショーバックおよびチャージバックプロセスは透明性、信頼度、アカウントビリティを高めます。

シナリオプランニング&予測

TBMとFinOps両方からの履歴データを組み合わせて、将来的なクラウド消費のさまざまなシナリオを評価できるようになりました。これにより計画作成と予測にとっての新しいチャンスが生まれます。

総合的な利点：

- **データに裏付けされた予測：** チームは履歴データを使い、多様な使用パターンをシミュレーションして、クラウドサービスをスケーリングするインパクトを予測できます。
- **リスク軽減：** さまざまな成長または削減シナリオの将来的なコストをシミュレーションすることで、チームは積極的にリスクを管理し、支出超過を防げます。

高められた価値： クラウドチームとプロダクトオーナーは、詳細なシナリオ計画ができるようになり、財務予測の信頼度が全レベルで大幅に改善されます。

新しいレベルのTCO最適化を実現

TBMの手法は、さまざまなアーキテクチャや提供方法論を活用した多種多様なテクノロジーソリューションのTCO（総所有コスト）モデル作成に優れていますが、テクノロジー供給チェーン全体でのパブリッククラウドサービスへの依存の増加は、TCOを理解する上で新たな複雑さを加えています。

クラウドサービスは従量課金型モデルで運用されるため、従来の静的なTCOモデルから、変動するクラウド費用を考慮したモデルに進化する必要があります。

部門ごとに分断された運用や、FinOpsの取り組みが存在しない場合、これらのコストの可視化が遅れがちであり、TCOを最適化するために必要な詳細情報が欠け、タイムリーかつ的確な意思決定が難しくなることがあります。

統合された実践からのTCOの利点

FinOpsの実践がTBMと統合されると、組織はTCOのより包括的な見方を得られ、また、その情報をタイムリーに受け取ることができるため、日々のクラウド支出を最適化できるようになり、以下のような様々な利点があります。

- **全体的なTCO最適化**：プロダクトチームは、デリバリー環境に関わらずテクノロジーサプライチェーン全体の支出を追跡、最適化できるようになります。
- **正確で自動化されたコスト配賦**：統合された実践により、配賦の自動化ができ、TBMとFinOpsチームが手作業でデータを組み合わせた場合と比べて大幅に時間を短縮できます。これによりプロダクトチームはより迅速に反応することができます。
- **動的なコスト追跡**：プロダクトチームにリアルタイムの更新が提供されるようになったことで、クラウドリソースを調整して、コストの急激な高まりや予算の超過に迅速に反応するだけでなく、予防もできるようになります。



タクソノミー全体でユニットエコノミクスを継続的に向上

従来、ユニットエコノミクスはクラウドネイティブのデジタルプロダクトとそれに関連するクラウド費用に焦点を当てていましたが、大多数のプロダクトはオンプレミスのインフラストラクチャーや運用費用など、クラウド以外のコストも発生させます。こうしたプロダクトのTCOを正確に把握して管理するには、TBMの提供する堅固なフレームワークが必要です。ユニットエコノミクスはクラウドおよびクラウド外のコスト両方を分析し、顧客取引やサービスインスタンスなど、提供された価値単位ごとのコストを割り出します。ユニットエコノミクスへの包括的な理解は、事業価値を強化し続けるために奮闘するテクノロジーとプロダクトチームにとって必要不可欠です。TBMとFinOpsの統合、特にFinOps要素をTBMタクソノミーにマッピングすることで、こうした複雑さに対応し価値創造の新しい機会をもたらします。ユニットエコノミクスをTBMタクソノミーの各レイヤーで切り分けることで、組織は事業成果のコスト効率性を継続的に高められます。

テクノロジーリソースプール

タクソノミーのこのレイヤーでは、ユニットエコノミクスはコンピューティング、ストレージおよびネットワークなどのコアリソースがどれくらい効率的に使用されているかに焦点を当てます。このレベルでの最適化を継続することで、より効率的なリソース利用とコストコントロールが実現し、デジタルプロダクトおよびサービスを開発、出荷、運用するコストが削減されます。

例：コンピューティングリソースプール

このリソースプールのユニットエコノミクスはバーチャル・マシン（VM）ごとのコスト、またはコンピューティングサイクルごとのコストに焦点を当てるかもしれません。VMの最適なサイズを見積もるか、リアルタイムの需要に基づき自動スケーリングすることで、組織は十分活用されていないリソースを減らし、各ビジネスユニットのコンピューティングコストを削減します。

例：ストレージリソースプール

ストレージリソースプールでは、ユニットエコノミクスは補完されているデータのギガバイト（GB）ごとのコストを中心に展開されるかもしれません。データ階層化を利用するか冗長なデータを除去することで、組織は重要なワークロードのためのストレージ容量を維持しながら、GBごとのコストを低減できます。

ソリューションレイヤー

ソリューションレイヤーでユニットエコノミクスを改善すると、結果として特定の事業成果を達成するためのコストに良い影響があります。これには、トランザクションごと、またはサービスごと、または提供された成果ごとのコストの計測が必要になるかもしれません。このレイヤーでユニットエコノミクスを最適化すれば、組織は特定の事業成果をどれくらい効率的に提供できているかを測定できるようになります。

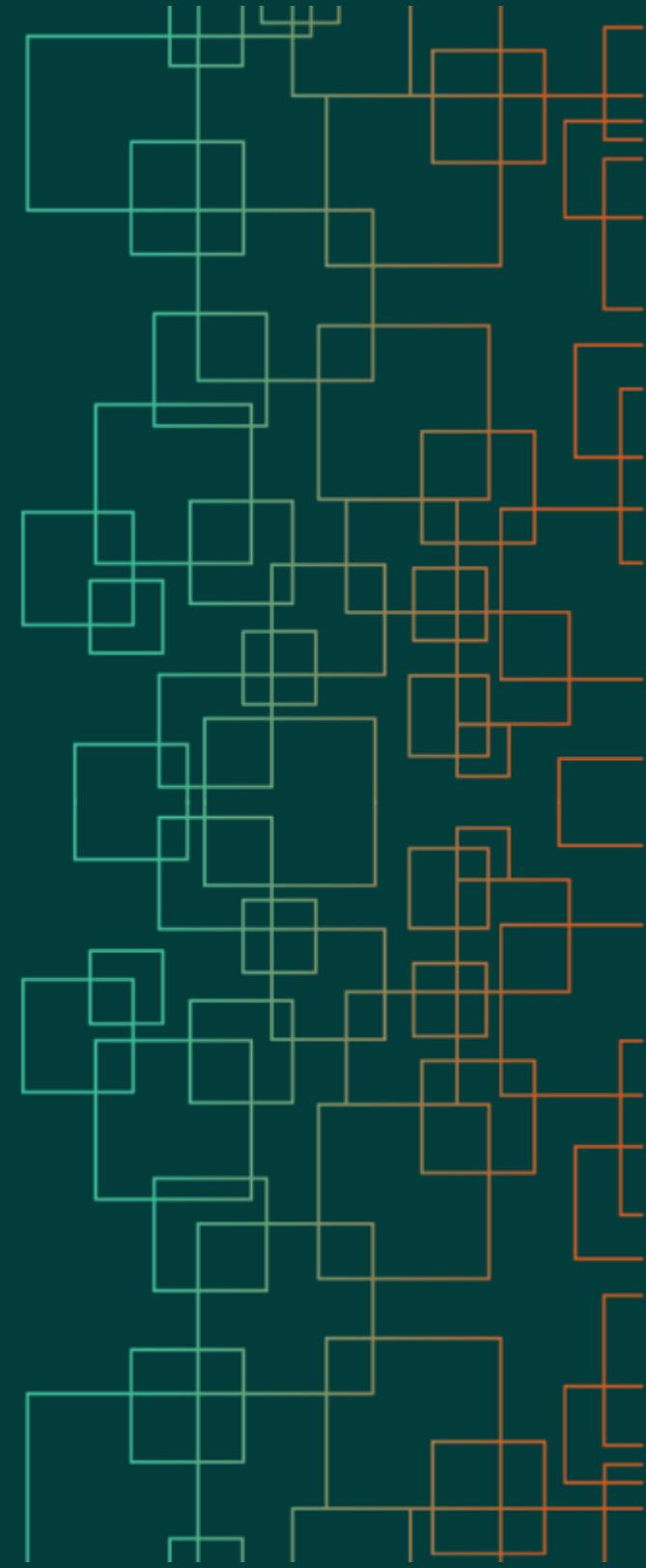
例：ローン申込み1件あたりのコスト

ユニットエコノミクスはローン申込みプロセス中に使用されるクラウドおよびオンプレミスリソースを追跡、最適化する可能性があります。処理されるローンごとのコストを高い品質を維持しながら削減できるため、組織はより低いコストでより多くの申込みを扱うことができます。

例：製造される車両ごとのコスト

この事例でユニットエコノミクスを管理すると、生産スケジュール、センサーデータ処理、および予知保全のための機械学習モデルに使用されるクラウドおよびオンプレミスリソースを最適化する可能性があります。これにより車両ごとのコストを削減できるため、メーカーはテクノロジーリソースコストを比例して増加させずに生産をスケーリングできます。

5章： 将来に向けた管理



ガバナンスとチェンジのリーダーシップ

TBMとFinOpsチームをもっと総合的なバリュー・マネジメント・オフィス（VMO）に変化させるには、整合、説明責任、効率性を確実にする強いガバナンスとチェンジリーダーシップが必要です。

ガバナンス は、組み合わせられたバリューオフィスの指針となるフレームワーク、方針、意思決定構造を確立します。強力なガードレール内に適合性と柔軟性を確保することが重要です。すべてのステークホルダーを代表する一元的な運営グループが主要な方針に合意し、分散型の意思決定と自律性を可能にしなが、監督することができます。

チェンジリーダーシップ は、FinOpsとTBMをひとつのVMOに融合することで発生する文化的および運用上の移り変わりを管理する上で同じくらい重要なものです。チェンジリーダーは、しっかりと定義されたチェンジマネジメント戦略を作成し、明確な目標を立て、影響を受けるステークホルダーを特定して、IT、ファイナンスおよびオペレーションチーム間のコラボレーションを促進しなくてはなりません。

透明性のあるコミュニケーション計画を立てることは、ステークホルダーに進捗、課題、マイルストーン情報を常時把握してもらうためのカギとなります。トレーニングと教育により、チームは新しいプロセス、ツール、データ統合に慣れることができます。

戦略的な指示が変化するとき、戦略的な方向性が変わる中で、TBMとFinOpsのチームは柔軟性と機敏さを維持する必要があります。重要な要素のレポートに注目し、出力されたデータを定期的にチェックして追跡することが役立ちます。

データ収集、インサイト生成の自動化、自動化された解決の自動化に向かうことで、敏捷性が強化されます。

まとめると、ガバナンスはルールや期待値を明確にすることで全体の枠組みを整え、チェンジリーダーはその枠組みを現場に根付かせるために、組織文化との調和や日々の業務への定着をリードしていきます。



ガバナンスの成功条件

ガバナンスの構造

定義された目標との整合
方針を実践することの説明責任
パフォーマンス監視指標



一体化した戦略

統一されたワークフロー統合
文化的な連携の促進
継続的な改善コラボレーション



コミュニケーションの活性化

機能横断型トレーニング
明確なロールと
ステークホルダーの連携
定期的な合同ミーティング



チェンジリーダーシップ

明確なコミュニケーションプラン
ステークホルダーエンゲージメントの
フォーカス
トレーニングおよびサポート



ビジョンのすり合わせ

共通の目標へのフォーカス
戦略的コミュニケーションの関与
統一された運用モデル



継続的な進化

柔軟なガバナンス フレームワーク



TBMとFinOpsの統合アプローチの段階的進化

🕒 初期段階

最初の段階で、パブリッククラウドリソースがどのように予算調達され、支払われ、消費されるかについてのTBMとFinOpsの実践者の視点はまったく異なり、平行しています。彼らはそれぞれのフレームワーク、データソース、方法論、成功の測定指標について深い知識を有しています。取り組みに関する大まかな認識はありますが、統合されたアプローチから戦略を練れるほどの深い理解ではありません。

💚 相互評価段階

統合が進むにつれて、実務担当者たちはお互いの分野における中核的な構成要素、推進要因、目的を理解するためのトレーニングを受けます。それぞれの分野を実務に落とし込む中で得られるデータや視点、知見に対する相互の理解と尊重が育まれていきます。非公式な連携やデータ共有が行われるようになり、やがて統合されたプロセスや手順を正式に整備する計画が立てられます。

🔄 統合段階

TBMとFinOpsチーム両方が、パブリッククラウドコストについて共通の認識を実現します。TBMはFinOpsと共に使用され、組織のクラウド消費についてさらなる透明性と理解がもたらされます。クラウドコストはTBMタクソノミーの全レイヤーと整合され、組織がクラウドリソースをどのように、どこで使用しているかについて可視性がさらに高まります。TBMはパブリッククラウドインフラストラクチャー支出について労働、サイバーセキュリティ、ライセンス費用を含む総所有コストを提供します。

🏔️ 価値最適化段階

成熟した統合アプローチを取る組織では、共通のデータソース、プラットフォームおよび方法論があり、両規律の実践者がパブリッククラウド消費量を粒度の細かいレベルで理解できるようにしています。統合されたプロセスは、報告と分析に一貫性を確保します。実践者は、財務パフォーマンス、運用の効率性、イノベーション、リスクおよびコンプライアンス管理と持続可能性を可能にするという観点から、クラウドの価値を評価できます。コスト回避戦略とクラウド移行に関する意思決定はTBMとFinOps両方のステークホルダーを代表して下されます。



成功の 測定指標

- TBMとFinOpsチーム間のパブリッククラウド消費量に関する一貫した報告
- クラウド財務管理に関連する方針に関する意思決定と変更にはTBMとFinOps両方のステークホルダーが含まれる
- パブリッククラウド消費量データはTBMコストモデルに完全に組み込まれ、タクソノミーのすべてのレイヤーに整合される



TBMでパブリッククラウドのさらなる価値を推進

組織がクラウド戦略を進化させる過程で、焦点は単なるテクノロジーの導入から、長期的な価値の最大化に移り変わります。成熟したクラウド価値の実現のため、オンプレミスとクラウド環境両方の理解、高度な財務管理の統合、および複雑なハイブリッド環境で情報に基づく意思決定が必要とされます。このレベルのクラウド価値実現ではTBMが重要な役割を担います。

🌀 オンプレミスコストモデリングにTBMを活用する

オンプレミスコストを理解することは、あらゆるクラウド戦略で重要です。TBMはオンプレミスコストモデリングのためのフレームワークを提供し、これにより組織は既存インフラストラクチャーの総所有コストを評価できます。総勘定元帳からのコストを関連するコストプールにマッピング、区分することで、TBMはオンプレミスシステムを実行する財務的なインパクトについて明確なインサイトを提供します。これで、ワークロードを移行、保持、回収するかどうか、情報に基づいた意思決定ができるようになります。さらに、TBMはオペレーションの費用と資本償却を追跡して、すべてのオンプレミスコストがハイブリッド戦略で確実に考慮されるようになります。

📖 推薦図書：インテリジェントクラウド導入

クラウドの価値最大化について理解を深めるため、[インテリジェントクラウド導入 \(EBook\)](#) を読むことをお勧めします。このリソースは、TBMを高度なクラウド実践と統合する戦略について徹底的に掘り下げ、クラウド投資を最適化するための包括的なインサイトと実行可能なステップを提供します。このEBookを参照することで、TBMとFinOps間の統合を円滑に実現するためのさらに繊細な視点を得られ、所属されている組織がクラウドテクノロジーを最大のポテンシャルまで活用できるようになります。

🔍 ハイブリッドクラウドでの意思決定サポートにTBMを活用する

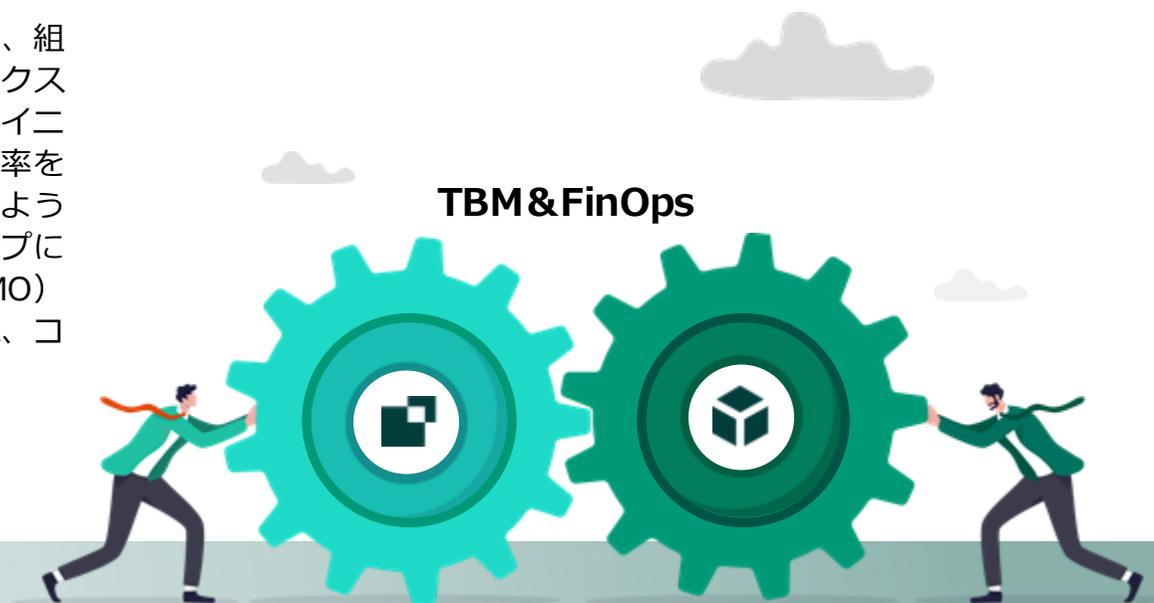
ハイブリッドクラウド環境ではコスト、パフォーマンスおよびリスクの管理が通常よりも困難になります。TBMは価値の側面を異なる実装オプション間で比較するためのフレームワークを提供し、意思決定に必要な不可欠なサポートを提供します。TBMを使用して、組織は多様な環境のワークロードのコストと利益をモデリングし、トレードオフを評価し、ベンダーロックインやセキュリティ上の問題などのリスクを特定できます。TBMはハイブリッドクラウドに関する決定が財務と戦略的ゴールの両方に一致するようにし、組織がクラウドの拡張性とオンプレミスソリューションのコントロールとのバランスを取れるよう助けます。

まとめ

テクノロジー投資の価値の最大化を望む現代の組織では、まだ実現していなければTBMをFinOpsと統合する措置を講じるべきです。TBMの総合的な価値管理フレームワークをFinOpsのパブリッククラウド支出の最適化に特化した集中に融合することで、企業はテクノロジーコストと消費量についての可視性を高められます。この統合は、情報に基づいた意思決定が容易にし、テクノロジー支出を戦略的な目標と一致させ、オペレーションの効率を高めます。

TBMとFinOps両方のフレームワークを導入することで、組織は総合的なTCO最適化を達成し、ユニットエコノミクスを改善できます。データ駆動型のインサイトで戦略的イニシアチブをサポートし、テクノロジー投資のコスト効率を改善するだけでなく、ビジネスのゴールとも一致するようにします。強力なガバナンスとチェンジリーダーシップに裏付けされたバリュー・マネジメント・オフィス（VMO）を確立すると、こうした実践が企業全体で組み込まれ、コラボレーションと説明責任が促進されるようになります。

最終的には、TBMとFinOps間のシナジーが組織にクラウド環境の複雑性を乗り越え、財務的な非効率性を減らし、継続的なビジネスの成長を推進する力を与えます。この統合されたアプローチを採用すると、財務ガバナンスを強化し、テクノロジーをビジネスの成功の戦略的なイネーブラーとして位置づけて、テクノロジー投資が最大の価値をもたらし、長期的な組織のゴールをサポートするようにします。



追加資料

TBM-Cloud Primer

TBM-Cloud Primerは、TBMの理念およびツールをパブリッククラウドサービスに適用するための補助的な入門コースです。このコースは、パブリッククラウドの導入がビジネスパートナーまたは消費者にデジタルアプリケーションを通じてソリューションを提供するコストにどのように影響するかを理解する必要がある上級テクノロジーおよび財務リーダーに向けて設計されています。AIG、Liberty Mutual、HSBC、ゴールドマンサックスなど、クラウドにかなりのワークロードを移行したトップ企業のベストプラクティスから学びましょう。TBMとFinOpsの実践が、ユニットコストの最適化、消費量管理及びTCO削減など、重要な成果でどのように協働するかを見てみましょう。

TBMプログラムリーダー、FinOpsプロフェッショナル、CIOおよびCFOは、このコースについてパブリッククラウドまたはハイブリッド環境の両方で全体的にビジネスマネジメント実践と規律の組織的な導入を推進するための包括的なアプローチの一環であると考えてください。

以下より詳細の確認およびTBM-Cloud Primerコースに登録ができます。（現在は英語版のみ、日本語化予定）

<https://www.tbmcouncil.org/learn-tbm/education/tbm-cloud-primer/>

TBM Executive Foundation コースおよび認定

明日のビジネスマインドを持つテクノロジーリーダー向けに開発された初の教育プログラムで、ビジネス感覚を研ぎ澄ませましょう。TBM Executive Foundation Certificationは、TBMプログラムの実行を成功させ、IT内でのビジネストランスフォーメーションを促進するために必要不可欠な知識を上級ITリーダーおよび財務マネージャーに提供します。コースを受講した後、TBMカウンスルにより認定を受けるチャンスが与えられ、自分のビジネス手腕をさらに実演できます。

TBM Executive Foundationコースは、TBMフレームワークと、それがどのように事業価値および支出、リソースと投資の成果の強化に使用できるかについての基本的な理解が必要な上級ITおよび財務リーダー向けに開発されています。

以下より詳細の確認およびこれから開催されるTBM Executive Foundationコースに登録ができます。（現在は英語版のみ、日本語化予定）

<https://www.tbmcouncil.org/learn-tbm/education/tbm-executive-primer/>



TBMカウンシルについて

2012年に設立されたテクノロジー・ビジネス・マネジメント（TBM）カウンシルは、TBMの方法論を教育、標準化、協力を通じて発展させることを目的とした非営利の団体です。このカウンシルは、世界および国地域からなるビジネステクノロジーリーダーの独立した理事会によって運営されており、多様なグループには、Mastercard、Wells Fargo、State Farm Insurance、Nike、Stanley Black & Decker、Equifax、ANZ Group、オーストラリア連邦銀行、Adidas、Mercedes Benzなど、世界の最も革新的な企業が含まれています。TBMカウンシルは変化する市場環境に迅速に対応し、ビジネス目標を達成するためのクラウドおよびアジャイル戦略を最適化するためのベストプラクティスを提供しています。

Website

tbmcouncil.org/jp/



会員登録（無料）

community.tbmcouncil.org/login-register-jp



